

借用された異形態性はどこまで音韻論的か

多賀 吉隆

1 何が問題か

もとの言語で音韻論的であった異形態の分布は、借用した言語においては、どの程度、音韻論的と考えればいいのだろうか。この論文では、例として英語におけるラテン語派生語 *Latinate words* の異形態 *-al/-ar* の分布をとりあげ、主に Tanaka (2007) における扱いを検討しなおすことで考える。なお形式的には、Tanaka (2007) は連濁の問題をあつかった Ito and Mester (2003) の書評論文であるが、*-al/-ar* の分布を含めた他の英語における異化の例も扱い、必異原理 (OCP, Obligatory Contour Principle) の性質と定式化を論じている。しかし、ここでは分布を中心に扱い、OCP の定式化の問題は扱わない。

以下では特にことわらないかぎり、英語の語例検索は、『小学館ランダムハウス英和大辞典』の物書堂による iOS アプリケーションでおこなっている。相対的な頻度は Google Books Ngram Viewer で確認している。英語の語誌については、*OED* のオンライン版に、フランス語の語誌については、*Dictionnaire historique de la langue française* による。古典ラテン語の確認は、*le Gaffiot* でおこなっている。

1.1 動機と規則

形態素にある音も周囲の音の影響で変わることがある。よくあるのは、同化、挿入、削除、異化である。そのため、音韻論的に動機づけられた異形態ができることがある。英語のよくある例をあげてみよう¹⁾。

(1) 音韻論的な過程による異形態

a. heap + -ed /-d/ → heaped /-t/ 同化

- b. heat + -ed /-d/ → heated /-id/ 挿入
 c. heritable + -ly /-li/ → heritably /-i/ 削除
 d. high + -th /-θ/ → height /-t/ 異化

屈折である (1a, b) の -ed は、規則動詞ならどれでも付き、音韻論的に動機づけられていて、規則的である。形容詞から副詞を派生する (1c) の -ly も生産性が高く、音韻論的に動機づけられていて、規則的である。

しかし、形容詞から名詞を派生する (1d) はもう生産性がない。それどころか、音変化により <gh> の表す /x/ が消えてしまったので、-/θ/ から /-t/ へ変えるのが、摩擦音の連続を避けるためであったことは、ほとんどの母語話者の知識にはおそらくない。蘊蓄の類になる。通時的には音韻論的に動機づけられていても、共時的には動機づけはなく、規則的ではない。

(1c) と (1d) の間に位置するようなのは、むろんあり、むしろ多いはずである。英語のロマンス語要素、つまりラテン語やフランス語から借用された要素でもそうである。例えば、接辞ではなく語基の方の起こるが、-ity がつくときの三音節短縮を考えてみよう。後ろから3つ目の音節に強勢が来るが、その母音が「短く」なるのが普通であるが、そうでないものもある²⁾。

(2) 三音節短縮の適用と非適用

- a. serene /i:/ + -ity → serenity /e/ 適用
 b. obsese /i:/ + -ity → obesity /i:/ 非適用

このような例は、完全には規則的ではないが、現在でもある程度の動機づけがある。とはいえ、この三音節短縮は英語における変化であり、ラテン語やフランス語における変化ではない。

では、借用のものと言語、ここではラテン語における異形態性は、ラテン語において、動機づけがあり、規則的であるかもしれないが、借用先の言語、ここでは英語においてはどのようなのであろうか。

1.2 形態素の由来と類別

ラテン語派生語は、素朴に言えば、ラテン語っぽい形の語であり、学問語に多い。中世後期・初期近代以降に学術的な文脈で、借用されたり、ラテン語の成分を使って造語されたりしたものである。綴りでは alumna “養女” > “同窓生(女性)”のようにラテン語そのもののものもあるが、natura > nature のよ

うに語末部分のみがフランス語っぽくなっているものが多い。主に扱う -al/-ar は、フランス語っぽくなったものを、英語においてさらにラテン語に近づけたものであるが、ラテン語の屈折語尾はない。

ラテン語っぽさが残っているので、古典ラテン語における異形態性が残っているものもある。分かりやすいのは、形容詞への否定の意味での接頭辞 in- である。これには、語基の語頭音への同化による異形態があった。それは綴りに残っているが、英語においては子音の削除を起こすものもある。

(3) in- “～くない” の異形態性

a. in- + tolerable	→ intolerable	/in/	暗黙値
b. in- + probable	→ improbable	/im/	同化
c. in- + rational	→ irrational	/i/	削除
d. in- + legal	→ illegal	/i/	削除

このふるまいは、同源の本来語要素 un- とは異なる。少なくとも丁寧な文法においては、子音が続く音と同化せずに発音される。

(4) un- “～くない” の不変性

a. un- + told	→ untold	/ʌn/
b. un- + productive	→ unproductive	/ʌn/
c. un- + rated	→ unrated	/ʌn/
d. un- + loyal	→ unloyal	/ʌn/

このような違いに加えて、形態論・音韻論的なふるまいの違いにより、派生接辞は Allen (1979) 以来、2つに類別されてきた。in-, -al/-ar などロマンス語接辞の多くが属するのが第1類、un-, -ly など本来語接辞の多くするのが第2類である。語彙音韻論においては、派生に水準があり、第1類が処理されたのち、第2類が処理される。それぞれに適応される音韻規則は異なるとされた。

(3) のように単純なばあいとはかく、ラテン語派生語の接辞に見られる異形態性は、どこまで音韻論の枠組みに入れることができるのだろうか。

1.3 ラテン語派生語に見られる音変化のなごり

接尾辞が付いた語にさらに接尾辞がつくことがある。ラテン語派生語の接

尾辞においては、語末における形に加えて、語末でないときの異形態をもつものがある。分かりやすいのは第2類に属するとされる -able である。これには異形態 -abil- がある。実際、capable に対して、capability である。第1類の -ity についても -itat- があり、author, authority, authoritative のようになる。

語末の形は、ラテン語からフランス語への音変化、さらには借用した英語内での音変化を反映している一方で、語中の形は、ラテン語の形を留めている。これはフランス語における学問語の派生に由来している (Roché 2009)。そのため、ラテン語の形に戻してから派生し、語末のみをフランス語なり英語なりにしているように見えてしまう。

フランス語においては、さらにやっかいなことに、語末の部分に同一の語尾に由来する、大衆形と学問形がある。なお、ラテン語派生語においては、語末が大衆形であっても、その前の部分が学問形であることは注意されたい。一方、英語では綴りをさらにラテン語に近づけている。-ar については、次のようにである³⁾。なお、ラテン語は男性・女性主格形ではなく、変化のもとになった対格形で示している。

(5) 英 regular、仏 regulier (語末のみ大衆形)

- a. regulam > 現仏 règle (半学問形)
古仏 rieule > 英 rule
- b. regularem > 仏 regulier > 中英 reguler > 現英 regular
- c. regularitatem > 仏 régularité ~ 英 regularity

(6) 英 auricular、仏 auriculaire (語末も学問形)

- a. auricula > 仏 oreille
- b. auricularem > 仏 auriculaire ~ 英 auricular

同様なことは、-al についてもあり、フランス語には大衆形 -el と学問形 -al がある。英語においては、語末に強勢があるフランス語っぽい形、例えば personnel のようなものを除き、-al になっている。

さて、それぞれにラテン語からフランス語へ音変化し、英語に借用されてさらに音変化し、綴りの改変によりラテン語に似せられた -al/-ar という異形態の分布は、まだ音韻論的に説明可能なのだろうか。

2 英語とラテン語における分布の違い

Tanaka (2007: 289-291, 295-299) では -al/-ar の異形態の分布について、Ito and Mester (2003: 63-68) によるラテン語の分布と最適性理論での分析を紹介し、英語はそれとは異なる分布をもち、それが異なる制約と順位づけによるとしている。Tanaka (2007) もすべてが規則的とはしていないが、英語における分布の規則性の弱さを示していきたい。

2.1 ラテン語における分布

まずは、対比するために古典ラテン語における分布を考えたい。-al/-ar の異形態性は、ロマンス語学でも Posner (1961) などで扱われ、長距離での異化の例として有名である。

Tanaka (2007) と Ito and Mester (2003) のあげる語例から古典期にみつからないものを除き、いくつかを追加し、接辞と /l/ との近さを基準に分類しなおして示そう。ただし、形容詞ではなく、同じ接辞をもつ名詞も使っている⁴⁾。

(7) 古典ラテン語における -al/-ar の分布

- a. なし : *navalis*
- b. 隣接 : *circularis, particularis, regularis, singularis, solaris*
- c. 母音1つ : *familiaris, peculiaris*
- d. 子音(連続)1つ : *palmaris, vulgaris* ≠ *sepulchralis*
- e. 音節1つ分 : *lunaris, pollicaris* ≠ *floralis, pluralis; legalis*
- f. 音節2つ分以上 : *militaris, lupanar, pollicaris, linearis* ≠ *larvalis, Lavernalis*

Ito and Mester (2003: 66-67) では、このようなデータから次のように定式化している。

(8) 古典ラテン語における制約の順位

$$\text{No-R}_{\sigma\sigma}^2 \gg \text{No-L}_{\infty}^3 \gg \text{a:lis} > \text{a:ris}$$

素朴に表現すれば「/l/ が語基に含まれるばあい、どれだけ遠くとも、-al が -ar に変わろうとするが、/r/ が直前の音節にあれば、そうしない」ということになる。細かいことをいえば、屈折によっては子音の /l, r/ が語末になるので、「隣接する音節」については修正が必要である。加えて、*larvalis* や *Lavernalis*

では、/r/の位置が規則より少し遠く、この点も修正が必要である。なお、larvalisはあとで問題になるが、古典期には“悪霊の”という意味である。現代語では、古典ラテン語のlarva“悪霊”を比喩により“幼虫”に意味を変えて借用したため、larvalも“幼虫の”の意味になっている。

ここでまず確認しておきたいのは、この規則が音韻論に動機づけられていても、純粹には音韻論的ではないことである。類似の形の接尾辞、例えば、形容詞派生の-il(is)や、指小辞の-(c)ul(us)には、このような異形態性がない。

さて、Ito and Mester (2003: 67)でも指摘されているように、-al/-arの相補分布は、時代が下ると崩れていく。上の語例でも規則にあてはまらないlegalisがある。これは、ドミティヌアヌス帝のころの用例がある。ただし、-al/-arがあくまでも形容詞・名詞化の接尾辞の1つにすぎないので頻度はそれほど高くないこともあり、現在までに集めた語例が少ないので、これが使用域が異なるためか、時代が遅いためなのかなどの理由は不明である⁵⁾。

相補分布が崩れることで、暗黙値の-alが増えていくことになる。(7f)にあるlinearisにもlinealisができる。(7c)にあたるので*filiarisが期待されるが、教父時代からあるのはfilialisである。しかし、palpebralisに対してpalpebrarisができたように、逆に-arが使われるものも出てくる。

2.2 近代における新語の分布はどうなっているか

前項で述べた古典ラテン語の規則(8)を満たさない形は、後期ラテン語・中世ラテン語などを通して、英語にもfilialのように伝わっているものもある。もちろんラテン語の規則に従うものも多く伝わっている。

これが問題となるのは、阻止と呼ばれる現象があるからである。つまり、すでにある同義語によって新しい形の語が作られるのが妨げられる。例えば、plagalに対して*plagarが仮に好ましいと誰かが判断しても、すでにplagalがあるので、これが使い続けられるはずである。

そのため、英語に限らず現代語では、その言語で好ましい規則に完全に従わない語がある可能性がある。そのため、もし規則性があるのであれば、新語においてむしろ明白である可能性がある。そこで、以下では、初出が1800年代以降のものを検討する。ただし、cis-lunarのように接頭辞による派生や新古典複合語の要素を付加したものは除いている。

とはいえ、英語の語形成を扱う研究において-alに異形態があることは、必ずしも述べられていない。例えば、西川(2006: 236-238)もそうである。しかし、幸か不幸か比較的新しい-arのものも見付かる。

ラテン語においてが -ar 現れうるものを(7)の分類の順でみていく。

2.2.1 /l/ に隣接するばあい

ほとんど -ar が現れる。とくに指小辞の -(c)ul(e) に続くばあいは必ず -ar である。このことはすでに、Raffelsiefen (1999: 239) が指摘している。20世紀のものでは cingular、frenular などがある。それ以外でも -ar が多い。例外的なのは、化学用語の molal “モルの” であるが、molar の方がよく使われているようである。これらはいずれも 20 世紀のものである。また、これらを末尾にもつ equimolal/equimolar、osmolal/osmolar もある。

2.2.2 /l/ との間に母音を挟むばあい

-ar、-al の両者がある。-ar には cochlear、foliar などがある。-al には mesogleal、mesothelial などがある。gangalion からの gangaliar/gangalial はいずれも 19 世紀に現れた。

2.2.3 /l/ との間に子音を挟むばあい

やはり、-ar、-al の両者がある。両者があるものに、valvar/valval、vulvar/vulval がある。いずれも -ar の方がよく使われている。さらに、-ar のみには bulbar があり、-al のみには algal、palpal がある。

2.2.4 /l/ との間に音節を挟むばあい

数が少ないので、音節数では分けない。ここでもやはり、-ar、-al の両者があるが、多くは -al である。botulinal、glossal、lecithal などである。両方あるものに、laminar/laminal、columnar/columnal などがある。laminar/laminal では使い分けがあるが、columnar/columnal では -ar の方がよく使われている。ただし、columnaris はラテン語にもある。片方のみ新しいものでは、lumbar がすでにあっただにもかかわらず、lumbal が 19 世紀に現れたが、すでに廃れている。

2.2.5 新語の総括

語基が /l/ で終わるものを除いて、-ar/-al の両方がある。語基中の /l/ との距離が遠いものでは、-al が多いが、そのばあいでも両者があるものでは -ar がよく使われるようである。

そこで、明確な規則性があるとは考えられない。

2.3 Tanaka (2007) による英語における分布

Tanaka (2007: 295) は、larval を例にラテン語と英語で分布が異なることをまず主張している。しかし、すでに述べたように larvalis は古典ラテン語に存在している。Ito and Mester (2003) の定式化に問題があるだけである。

この点はあまり問題ではなく、Tanaka (2007: 297, fn.10) の新しい点は、/l/ の間の OCP に局所性を入れたことであり、次のように定式化している。ただし、(9b) は注に含まれるもので、(9a) との違いが ‘can be ascribed to a minimal reranking’ のように弱い表現で説明されている。また、2つの使い分け何によるかは明言されていない。

(9) 英語における制約の順位

- a. *R-σ-R > *L-σ-L > *L-Ft-L > *FAITH / 暗黙値
 b. *R-σ-R > *L-σ-L > *FAITH > *L-Ft-L / local など

素朴に表現すれば、a は、「/l/ が同じ音節か、同じ韻脚の中にあれば、-al を -ar に変えようとするが、1音節の距離の中に /r/ があれば、そうしない」ということであり、b は、「/l/ が同じ音節の中にあれば、-al を -ar に変えようとするが、1音節の距離の中に /r/ があれば、そうしない」ということである。

非常に困るのは、どちらが適応されるのが明言されていないことである。(plan-ar) や (vulg-ar) には (9a) を適用するのに、(clon-al) や (alg-al) には (leg-al) と同様に (9b) を適用しなければならない理由は不明である。

制約の順序の問題はさておき、/l/ と接辞の距離の問題をこの下では検討しよう。(9a) を適用する familiar/familial などについては、fa(mili-ar) と fa(mi-li)-al のように韻律の構造が違うことで説明しようとしている。つまり、familiar では、最後の i がわたり音で、familial では母音としている。そうであれば、前者では同じ韻脚の中なので異化がおこり、後者では同じ韻脚の中にないので異化がおこらない。

しかし、『ランダムハウス』で語末が -iar で発音の記載があるものを調べると、familiar、peculiar ではわたり音であるが、conciliar、domiciliar、foliar では母音である。語末が -ial のものでは、familial では両者があり、filial、monial、pallial、telial では母音のみである。他の辞書では -iar/-ial の両者ともに母音のものが多く、違いがあるとは考えにくい。

さらに、linear、lacunar、laminar のように間の母音の数が多く、同一の韻脚の中に /l/ と /r/ が含まれると考えにくいものもある。linear は <e> が /j/ であ

れば、(9a)にあてはまるが、/i/である。とくに lacunar は遠いだけでなく、強勢の位置から la(cunar)と分析しなければならない。lacunal という異形はあるが、lacunar/lacunal spaces のような表現でも圧倒的に lacunar が使われている。

2.4 どう考えればいいのか

2.1 と 2.2 でみたように、後期ラテン語・中世ラテン語でも、英語の新語でも -ar/-al は、相補分布をしていない。その中でいくら明確な規則を求めるのは不可能である。規則性がないデータからでも「規則」を定式化できるであろうが、それに意味があるのであろうか。

規則が作ることができるのであれば、それはデータに何らかの制限をかけられたばあいであろう。Raffelsiefen (1999: 236-240) は、英語において、同じ韻律語の中に同じ流音 (/l, r/ のどちらか) があるのを嫌がる制約と同じ音節の中に同じ流音があるのを嫌がる制約があるが、現在では前者があまり順位が高くなく、後者の順位が高いとする。変化があったので、すでに言及したように、-(c)ul-ar のばあいを除くと規則的でないと述べている。

なお、Raffelsiefen (1999) は /l/ の制約と /r/ の制約をまとめている。この点は、Ito and Mester (2003) や Tanaka (2007) と異なっている⁶⁾。Raffelsiefen (1999) はこれで *-rar が禁止されること、例えば *culturar がなく、cultural であることを説明している。ただし、-al/-ar の選択はやはり単なる音韻論的ではない。例えば、-er が語尾であれば、viticulterer のように同じ音節の中にあってもよい。

Raffelsiefen (1999) では現代英語で関与するのがもっぱら同音節中の流音であることに着目しているので、-(c)ul-ar の規則性のものがあげられているが、他にも規則的なばあいがある。例えば、-tion-al や -ic-al である。後者は、いかにも英語のロマンス語彙の形であるが、実際のロマンス語では英語に比べると少ない。仏 lexical のように lexique + -al のように -ic の名詞から形容詞を派生するものももっぱらである。英語では、biology に対して、biological であるが、中間の *biologic はほとんど例がなく、biologics も“生物製剤”と意味が異なる。

このような規則性に対する限定から、派生における -al/-ar の選択が音韻論的な規則のみに支配されているとは、考えられない。Booij (2010) は、構文文法の考え方を形態論に適応した。全体がスキーマに従わず類推で形成されるにしても、下位スキーマにより規則的なものがあるばあいがある (Booij

2010: 88-93)。これは、ここで検討しているものをよく説明する。

ところで、規則性がないことは、動機づけがないことなのであろうか。語例が少ないのであるが、語基の中に /l/ を含み、語末が -al/-ar であるものの両者が辞書にあり、それらが同義であるばあい、ここで検討した範囲では -ar の使用頻度が高い。このことは、音だけであればこの環境で、-ar が好まれることを示唆している。

その一方で、-al のみが辞書にあるばあい、例えば、palpal では、palpal によく続く名詞に palpar を前置したものはコーパス中に見出せない。ただし、Google で検索をかけるとわずかには見付かる。フランス語では palpaire、スペイン語でも palpar であり、このような外国語からの干渉を受ければ、palpar のような形が出てくるかもしれない。しかし、ラテン語や外国語の知識がないのであれば、-al/-ar は競合せず、-al が現れると考えられる。

3 まとめ

英語におけるラテン語派生語にみられる接尾辞 -al/-ar の分布を、『小学館ランダムハウス英和大辞典』（第2版）をもとに検討し、Tanaka (2007) が考えるような規則性がないことを確認した。-ic-al のような英語におけるロマンス語彙に特徴的な形容詞派生では -al の使用が規則的であるが、ラテン語に似せたものでは、Raffelsiefen (1999) が指摘するように、指小辞 -(c)ul- に続くばあいのみ -ar の使用が規則的であり、それ以外では規則性は認められない。このことは -al/-ar による派生が、Booij (2010) のいう「構文」によることを示している。しかし、競合する形があるばあいには、-ar の頻度が高く、選好が音韻論的に動機づけられていることが示唆された。

注

- 1) (1c) では、basically のように綴りのうえでは、2つ音があるようにみえるものもあるが、発音されるのは /l/ 1つだけである。
- 2) あくまでも英語音韻論の中での扱いとして「短い」のであり、音声学的は長いかもしれない。とくに bother/father の母音を同じように発音する話者では長い可能性がある。
- 3) 英語は古フランス語の形に由来するものが多いが、特に必要がないばあいここでは現代フランス語で代用している。同様に、中英語も現代英語で代用している。
- 4) lupanar “売春宿” は中性名詞であり、中性の語末には屈折の -is がない。

- 5) -ar の直前の子音のほとんどが歯音 /t, d, n/ であり、これが関係しているとなると、長距離での異化が条件つきである可能性もある。つまり、legalis が規則的で、pollicaris が例外である可能性もある。
- 6) この点により、異なる予測がされるはずであるが、ここでは扱う余裕がない。

参考文献

- Alain, Rey. ed. (1992) *Dictionnaire historique de la langue française*. Paris, FR: Dictionnaires le Robert.
- Allen, Margaret Reece (1979) “Morphological Investigations.” Ph.D. dissertation. University of Connecticut.
- Booij, Geert (2010) *Construction Morphology*. Oxford UP: Oxford University Press.
- Gaffiot, Félix (1934) *Dictionnaire illustré latin-français*. Paris, FR: Hachette.
- Google (2013) “Google Books Ngram Viewer.” <https://books.google.com/ngrams>
- Ito, Junko and Armin Mester (2003) *Japanese Morphophonemics: Markedness and Word Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 小西友七・安井稔・國廣哲彌・堀内克明 (編) (1994) 『小学館ランダムハウス英和大辞典』第2版. 東京: 小学館. (物書堂, iOS アプリケーション, Ver.1.2.1)
- 西川盛雄 (2006) 『英語接辞研究』. 東京: 開拓社.
- Posner, Rebecca (1961) *Consonantal Dissimilation in the Romance Languages*. Oxford, UK: Basil Blackwell.
- Raffelsiefen, Renate (1999) “Phonological constraints on English word formation.” In Geert Booij and Jaap van Marle. eds. *Yearbook of Morphology 1998*. Dordrecht, NL: Kluwer Academic Publishers. pp. 225–287.
- Roché, Michel (2009) “Un ou deux suffixes? une ou deux suffixations?” In Bernard Fradin, Françoise Kerleroux, and Marc Plénat. eds. *Aperçus de morphologie du français*. Paris, FR: Presses Universitaires de Vincennes. pp. 143–173.
- Simpson, John and Edmund Weiner. eds. (1989) *The Oxford English Dictionary*. 2nd edn. Oxford, UK: Oxford University Press. <http://www.oed.com/>
- Tanaka, Shin-ichi (2007) “On the nature and typology of dissimilation.” *English Linguistics*, 24 (1), 279–313. The English Linguistic Society of Japan.

